

Q 8 小学校で、保健室登校でした。中学校でも、同様の状態が続くことが予想されます。小学校と中学校の連携をどのように図ればいいでしょうか。

現 状

- 1 小学校と中学校の連携の場として多いのは、小学校6年生が中学校1年生として進学する時期に設定される小・中連絡会である。

この連絡会の出席者は、学校によって若干異なるが、小学校6年担任と次年度の中学校1年担当予定者である。そのため、実施時期が3月下旬から4月上旬になることが多い。

- 2 市町村単位で行われる生徒指導主任会や生活指導研究協議会等においても小・中連携の場として情報交換が行われているところもある。
- 3 市町村単位で行われる養護教諭等研修会でも、保健関係の内容だけではなく保健室等登校を含むメンタルヘルスについても協議されることも多く、関係学校の情報を得る場となっている。
- 4 このように小・中学校が、生徒指導や不登校の現状について情報交換する会議等の場はあっても、個々のケースについて具体的に欠席日数や遅刻・早退の状況、不登校のきっかけや継続の理由、家庭の状況、学校での対応状況などについて、情報交換する時間的な余裕がないのが実状である。

考えられる対応例

- 1 小・中連絡会の開催時期をできるだけ早めに設定し、個別の事例について具体的に情報を提供できるように会議の時間配分も工夫する必要がある。

その際、担任だけでなく、養護教諭や生徒指導主任等も参加し、中学校が受け入れる際の留意点を十分検討し、個別の記録表を作成するなど対象となる児童が、中学校に入学した当初から具体的な対応ができるようにすることが大切である。



- 2 一つの中学校に複数の小学校から進学するので、生徒指導主任会等では分科会を中学校区ごとに分け、相互に情報交換できるように会議の運営を工夫する必要がある。
- 3 学校だけでなく自治体の教育委員会や福祉、保健等の行政担当者、医療機関、児童委員などが集まり、不登校児童生徒の現状や今後の対応についてサポートチームを組み、対応することも大事である。
- 4 国立教育政策研究所生徒指導研究センターは、小学校時代に不登校経験がある生徒については、中学校入学直後から欠席が多くなり、不登校経験のない生徒については、9月から欠席が多くなるという調査結果を発表している。その対応策として、小学校は小学校時の不登校経験や、欠席、遅刻、早退の数などについて中学校にしっかり情報を提供する必要性を強調している。また、中学校では欠席が2日続いた時点で校内の支援体制を組織し、具体的な対応方法を早めに検討する必要があることを述べている。